

萩

池松 孝子

萩は東南アジアにも自生するが、日本人のように萩の花を愛でる伝統を持つ民族はないようだ。公園など比較的身近な所でも目にする。伝統的、文化的に親しまれてきた歴史からか、とりわけ寺社との取り合わせが馴染むように思う。鎌倉の宝戒寺の白萩、海蔵寺の参道石段の萩など何度訪ねても「萩を迎える」喜びを感じる。

確かに他の花に比すると派手ではないが、厳しい夏を終え、秋に向かう落ち着いた季節感に合うものとして好まれたようだ。四季の移り変わりを感性の根幹に持つ日本人ならではの。秋風に揺れる萩の姿、咲きこぼれるような満開の姿、さらに散って地に広がる情景を愛でる。

『万葉集』でも、梅よりも桜よりも多く詠まれているのが萩である。確かに秋の七草でもまず、最初に萩が詠まれている。草かんむりに萩、まさに萩を代表する植物だ。しかし、平安以後の王朝和歌では萩に取って代わられる。ここに万葉人と王朝歌人の違いを見て取ることができる。

あの深い緑の中からつつましくのぞき見える小さな花。そうありながら、次から次へと咲いていく。しんなりと枝垂れ、こぼれんばかりに花をつけた枝は大きくうねっても、その露をこぼさない。女性に象徴されるたおやかさと強さを併せ持つ萩の花だ。

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

芭蕉

萩の花は「鹿鳴草」ともいわれる。鹿は日が暮れると里近くに下りてきて、花の咲いた萩の草叢、あるいは小さな花が一面に散った上に臥せて夜を明かす。そしてまた、朝になると山に帰るといわれるが、実際の生態はどうなのか。萩の花の時期と牡鹿の鳴く時期が一致するからでもあったのだろう。あの秋の牡鹿の鳴き声は萩を花嫁に得ようとしているという解釈さえある。

定番となっている鹿と萩の取り合わせ、それは和歌の世界だけではない。尾形光琳の「秋草萩鹿時絵」をはじめ、硯、貝合わせなど美術工芸品の意匠として数多くの名品が今に残っている。「萩文化」と言ってもいいだろう。